令和六年十二月三十一日発行

北北海道現代俳句協会会報

第六十号

第三十五回総会開催

令和六年四月十四日
旭川市ときわ市民ホール

○第三十五回総会

令和六年四月十四日（日）第三十五回総会を旭川市ときわ市民ホールにおいて開催。出席者は三十名。総会議案書に沿って事務局からの令和四年度の事業、会計の報告と令和五年度の事業計画合わせて予算案の説明の後、出席者の賛成多数で承認された。

○総会に続き同会場にて第三十四回北北海道現代俳句大会。俳句作品は一一九組二百三八句、選者十九名の厳選の結果により左記の入賞者へ賞状賞品を授与した。講演は松王かをり氏（中北海道現代俳句賞選考委員）を講師による演題（「藤谷和子を語る―戦後俳句をめぐって」。大会終了後会場を六花亭に移動し懇親会。二十五名出席。

◇大会賞はじめとする高得点の作品は次の通り

冬の夜民話のように妻といる　佐々木　宏

木の根明く相席してもよいですか　石川美智子

時に死はふんわりと来る波の花　斉藤　郁子

答えなどなくていいかも春の海　小泉　晃治

多喜二忌や0番線の消ゆる駅　増田　植歌

海鼠腸やその夜真紅の夢をみる　橋本　喜夫

松王かをり特選

死はかかるやさしさ匂ふ掛毛布　橋本　喜夫

戦争を知ってゐる人豆を蒔く　井口寿美子

冬の夜民話のように妻といる　佐々木　宏

入選

囀ついてくるハイヒール脱いでおく　秋葉　礼子

鳥帰る特急宗谷とは分かれ　村　一草

見つめれば見つめ返してくるパンジー　八田　昌代

○北海道現代俳句大会

令和六年六月九日（日）ホテルリソル函館に於いて第三十三回大会。講師、現代俳句協会副会長　対馬康子氏

○吟行

令和六年九月一日あさひかわ北彩都ガーデン内を吟行した後、旭川市宮前二条一丁目市民活動センターで昼食と句会。会員外の参加者を合わせて二十九名。

句会作品（五十音順）

虫潰す指が菩薩の指に似て　青山　酔鳴

花野風ふいに船乗りになりたし　五十嵐秀彦

欠けてゐしレンガの倉庫つづれさせ　井口寿美子

さんざめく子らの声満ち晩夏光　かさいともこ

青胡桃忘れぬように地に保存　加藤ひろみ

女郎花句繕ひする立ち話　小泉　晃治

駅ホールがらんと秋の日と少女　佐々木　宏

秋の雲吟行会へどんどん歩く　十河　宣洋

生き残り死に残りとや秋の蝶　西川　良子

散るものは自白のやうに風の萩　橋本　喜夫

団栗の青し鴉の鳴き止まぬ　柊　月子

トリガーは赤とんぼ潮時の恋　藤原ハルミ

韃靼の空色もらふ蜻蛉の眼　村　一草

第三十四回俳句大会講演記録

藤谷和子を語る
―戦争句をめぐって―

松王　かをり

先ず橋本会長より松王かをり講師の紹介があった。藤谷和子さんの俳句に惹かれ九回のインタビューを纏めたのが著書『最果ての向日葵』である。略年譜より（以後スライドを操作し乍らの説明）昭和二年樺太庁真岡（現ホルムスク）生まれ。同二十年引き揚げ予定がソ連軍の艦砲射撃を受け、二十三年三月下旬真岡を引き揚げ函館に上陸。とりわけ悲しかったという姉八重子の死を描いたエッセー「丘の眺め―真岡」平成四年『艀』三号が紹介された。「私の人生を決定的にしたのは樺太に生まれたこと、引き揚げの経験をしたこと」これは幾度も仰ったという。戦争への思いは以後すべての句の通奏低音として響いていると語る。次に六十年に及ぶ句作『草木舎』作品と二冊の句集『瞬』『生年月日』よりテーマ毎に句を挙げ説明された。

1　初学の頃

北海道新聞へ投句を機に伊藤凍魚氏「氷下魚」函館支部句会へ入会。ただ夫の無理解、句会では女性一人と悔しさから俳句を続けられたと言う。

※万の虫鳴かせ虫売りさみしがる

そして息子さんの耳の障害がその後の生き方一生を決定づけた事。

※冬灯散る指きらきらと話しけり

2　樺太・戦争

※雲みんな露西亜へ流れ返り花

鰯雲積んでロシアの船が出る

鳥けもの草木を言へり敗戦日

八月や千代に八千代に米磨いで

四句目中七の措辞のアイロニー。米を磨ぐ行為自体が生きる証と仰ぐ。

3　隠れ戦争句

※いづれそのうちはつとりとけいてんに雪

掲句は平成十二年道立近代美術館に於て戦争報道写真展があり、焼け跡の銀座に残った服部時計店を詠んだもの。「季節は夏だったけれどいずれ冬が来て雪が降るぞ、いずれそのうち戦争がって。」そこで松王先生の考察。「ここでは雪と戦争は同列にあり美しい情趣を伴った本来の雪ではない。戦争戦火飢餓死等の戦争にまつわる万感の思いを雪という一語に託したのだろう。和子渾身の隠れ戦争句だ」と語られ強く胸に堪えた。

4　人間・生き物

※杉菜原たつたひとりをどうしやう

寒紅のいろそれぞれの死後の景

五十嵐秀彦氏『最果ての向日葵』書評中「藤谷さんの俳句には暗い屈折、ある種の虚無感のようなものが隠されている。俳句は人生の障害を解決しきれない詩型だが、人はつぶやくことで折り合いをつけることができる。」という文章に対し和子俳句の本質をお書き下さっていると述べる。

※馬は馬の影曳いてゆく夏野かな

5　老い

※着膨れて一生けんめい老いてゆく

わたしにもまだ泣くちから梅白く

6　亀鳴く

※亀鳴くを聞きそびれたり改元す

『最北の向日葵』棹尾の句。後に『草木舎』終刊号に呼応するような句、

※薬包の隅で小さく亀鳴けり

を見た時、最後のメッセージと受け止め涙が溢れたと声を詰まらせた。

「言い尽くさずに済むことが俳句の魅力。俳句は人生をしっかり受け止めてくれた。」という俳句観。これが能動でなくて何であろう。インタビューに因る生の声を交え藤谷和子さんの生涯と俳句に触れる貴重な講演であり時間であった。

（村　一草　記）

諸家近詠

たましひ抜ける繭玉の亀裂より
春の雪けふ恐竜は絶滅す
蜘蛛死せりいつも虚空を抱きしめて
つづれさせ闇に断末魔を宿し
地吹雪を分け預言者のやうに立つ

橋本　喜夫

クロッカス地に花置きし如くなり
顔深く包みて唯ぞ寒参り
切干や母の晩年おだやかに
音もせず障子に映る鳥の影
大津波凍てし一夜の地獄絵図

小畠スズエ

夜も青き空の奈落や北辛夷
風死して秒針過去を振り切りぬ
二重虹裏切りに似て早世す
風鈴草よもつひらさか灯しをり
おほかたは消えゆくいのち雪蛍

加藤ひろみ

初鏡しみじみ出汁の効いた顔
流氷にルビーやサファイア詰まってる
春北斗こぼれてきそう父のこえ
イントロは水の音です卒業歌

小林　ろば

恋猫の中にもいるさアウトロー
八方の雪解しづくの夜を徹す
満天星の花や一番星さがす
白骨のごと拾ひたる百合の花
にぎる手のまだ見つからぬ女郎花
背の雪見えずに払ふ胸の雪

西川　良子

鳥帰る空のほつれを縫ふやうに
傘持たぬ猫は小さく五月雨
蟬の死を明朝体で書き起す
星涼し夜の体に水を足し
愛されず雪にもなれず雪蛍

柊　月子

残る雪映像戦火の裏表
遺されし結婚記念日芽木の中
決意せる初診の扉花菜風
尋ね来て午報なつかし村の春
日めくりに祝日つづく春落葉

久居　智子

春吹雪芯の無くなるやうに止む
噴水のぴたつと考える時間
大姥百合てふ月光が立ってゐる
永遠のメリヤス編みを冬といふ
百万回溜め息をつけば梟

村　一草

○新会員の近詠

ふらここの復路はなにも考へぬ
老鶯や湛水とめどなく碧く
音のみを聴き花火とは淋しき唄
解体の明治のトラス小鳥来る
眠れない羆よ眞神なき山よ

青山　酔鳴

雁帰る天北原野経回りて
えぞにうや海をはさみて利尻富士
汗しとど座りなほして食ふ西瓜
秋澄むや指呼なる風車まで三里
拓地いま荒野に雪の降りつのる

井口寿美子

つばくらめ古き窯小屋慕ひ来る
花吹雪目分量もて釉薬解く
手轆轤の微かな狂ひ走り梅雨
鼻曲り鮭がのけぞる歳暮かな
風花や老人割の利く茶房

伊藤千枝子

天北の縄文遺跡鳥帰る
蛍火や人工衛星過りたる
縦走の朝が始まる露葎
水晶の鱗片剝がれ霜柱
天地の真白なりけり霧氷原

上田美千代

青き踏む解毒してゆく身体かな
蝿生まる太陽フレア浴びながら
秋雨の音は誰かを許す音
惑星はわたしをまはる冬至風呂
冬の星ひかる忘れられた木馬

藤原ハルミ

事務局からのお願い

会員の減少が続き困惑していますが、今年は六名の方が入会されました。皆様の周囲に俳句を楽しまれている人や興味のある人はいませんか？一声かけて会員を増やしましょう。

令和七年四月二十日（日）は第三十五回俳句大会です。大会要項と出句用紙を同送しますので御協力をお願いします。ここ数年、会員外や他の地区からの協力でなんとか開催出来ている状態ですが、今年はぜひとも北北海道の皆様の多くの作品で大会を盛り上げましょう。

また、句集、俳句評論集などの刊行をされた時には事務局へお知らせください。

事務局も後期高齢者まっただ中で充分な活動をできず、ご迷惑をかけていますが皆様の御協力が励みになると思います。よろしくお願いいたします。

（加藤ひろみ）

第35回 北北海道現代俳句大会

第35回北北海道現代俳句大会を下記の通り開催いたします。
この大会は、会員はもとより、どなたでも自由に参加できますので、お誘い合わせの上、ご応募くださいますよう、ご案内申し上げます。

一、日時・場所
令和七年四月二十日(日)　午後一時～
旭川市ときわ市民ホール
旭川市五条四丁目　電話〇一六六―二三―五五七七
※十二時三十分から受付
大会費　一、〇〇〇円
懇親会費　五、〇〇〇円
変更は五日前までに連絡のこと

二、講演
演題　「猿蓑ノート(仮題)」
講師　籬　朱子

三、講評

四、表彰　北北海道現代俳句大会賞　ほか

五、応募規定
二句一組　一、〇〇〇円　出句料は作品に同封のこと
新作未発表作品に限る。何組でも可、前書き不可
所定用紙(コピー可)または二〇〇字詰原稿用紙使用

六、締切　令和七年二月十日(月)　必着

七、送り先
〒078-8320 旭川市神楽岡十条一丁目二―二
加藤　ひろみ
電話・FAX〇一六六―六五―〇八二〇

特別選者
籬　朱子

選者
橋本喜夫
秋葉礼子
井口寿美子
伊藤千枝子
かさいともこ
小泉晃治
小林克史
小林ろば
佐々木宏
十河宣洋
田中徹男
谷川かつゑ
丹下美井
西川良子
柊月子
久居智子
前田恵
三国眞澄
19名

主催　北北海道現代俳句協会

お知らせ

本間美香さんが二月に逝去されました、ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

今回も報告事項のみの会報となってしまいました。俳句だけではなく詩や散文エッセイなど俳句以外の原稿も受け付けます。寄稿をお待ちしています。
寒さにむかう時節です。体調管理に気を配り健吟の時間を過ごしていただきたく思います。

令和六年十二月三十一日　第六十号
発行人　橋本喜夫
発行所　北北海道現代俳句協会
〒078-8345 旭川市東光五条六丁目
橋本喜夫方
電話（〇一六六）三四―四〇二五
印刷所　旭川市三条通四丁目右一号
㈱あいわプリント